

## 防災のあり方を Unlearn ～『日頃から防災意識を高く持とう』の再考～

群馬大学大学院理工学府教授

金井昌信

### 災害犠牲者ゼロの社会実現に向けて

自然災害の多発化、激甚化を受け、行政による防災対策（公助）だけでなく、住民一人一人に適切な備えと行動（自助）が求められている。この状況のなかで、我々防災関係者は、全住民に対して異口同音に「日頃から防災意識を高く持って、災害に備えよう」というキャンペーンを行ってきた。これによって、防災に興味・関心を持ち、具体的な備えを行うようになった住民がいることは間違いない。しかし、現状において、多くの住民がちゃんと災害に備えていると認識している人はいないのではないか。これまでの対策の方向性（みんな、頑張ろう）は理想的かつ美しい政策方針であり、多くの人を受け入れやすいものであると言えよう。しかし、あと何年、同様のアプローチで住民に働きかけたら、防災意識を高く持ち災害に備えるようになるだろうか。悲観的な観測になるが、現在備えることができていない人々は、これまでと同じ方針で対応していたのでは何も変わらないのではないだろうか。それらの人々が備えるようになるのは、自身が被災したとき、すなわち「痛い目」を見たときとなってしまうのではないか。

住民の防災行動を促進し、被害を軽減するためには、これまでとは異なるアプローチも必要では

ないか。そこで紹介したいのが『Unlearn（アンラーン）』である。『Unlearn（アンラーン）』とは、“これまで身につけた思考のクセを取り除く”ことであり、“これまでに学んだ知識や身につけた技術を振り返り、さらなる学びや成長につながる形に整理し直すプロセス”のことである<sup>1)</sup>。防災においても、個々の住民の防災行動を促進するために、これまで当たり前としてきた「日頃から防災意識を高く持とう」という前提を一度見直して、災害犠牲者ゼロの社会を実現するために、個々の住民に求めるべき備えや考え方を再考してみる必要があるのではないか。

そこで拙稿では、上記のような問題意識のもと著者が実践している地域防災活動（地区防災計画の策定や講演・研修など）において、地域住民に提案している「日頃から防災意識を高く持とう」に変わる災害への備えに対する考え方（姿勢、態度）を紹介したい。

### “日頃から”の再考

まずは、“日頃から”防災意識を高く持つ必要があるのかについて再考したい。

極端な例になるが、好天が数日続くとの予報がでている晴れた日に、風水害の心配をする必要はない。風水害から命を守るためには、「台風が数

日後にやってくるという予報がでたとき」や「実際に雨が降り始めたとき」、「避難情報がでたとき」にその状況や情報に応じた適切な行動をとることができるかどうか重要となる。すなわち、日頃から意識することよりも『そのとき、意識して行動する』ことが必要になる。

ここでリスクを回避するために『そのとき、意識して行動する』ことが必要になるのは、防災だけではない。例えば、我々が生活するうえで身近なリスクと考えられる交通安全、防犯、防疫なども同様である。自宅にいるときに車に注意する必要はないし、他者に会わないのであればマスクをする必要もない。交通量の多いところを通るときや、人がたくさんいるところに行くときに注意して行動することができれば、リスクは低減する。

一方で、交通安全、防災、防疫と防災には、大きく異なる点がある。それは頻度と能動的か受動的かという点である。交通安全、防災、防疫は、外出した際に気をつけることが求められるので、ほぼ毎日気を付けることになる。そのため、日頃から意識する、という言い方でもそれほど違和感はない。さらにこれらのリスクは、自ら気を付けるとき（外出するタイミング）を選ぶことができる。一方で、防災は、その頻度は毎日とは比べものにならないくらい低く、かつそのタイミングは受動的（自分で災害にあうタイミングは決められない）である。そのため、相手（自然）から押し付けられたタイミングで、「今がそのとき」と頭のスイッチを切り替えて、行動できるかどうかが生死を分けることにつながる。

もちろん、防災についても日頃から意識することで、そのときに行動できる可能性が高まるかもしれない。しかし、日頃から意識することに限界があるのであれば、これに変わる実行可能かつ具体的な対策を考えるべきであろう。そこで、『頭のスイッチの入れ替え』を提案したい。すなわち、日頃から意識するのではなく、1年に1度でよいので、防災のこと、と言っても、あれこれ

考えるのではなく、災害で死なない方法を考える日をつくることを提案する。具体的には、自宅に想定されている災害によって、自分を含めた家族が犠牲になるような状況を想定し、そのような状況になっても、犠牲にならないためには、どうしたらよいかを具体的に考える。講演等では「年に1回、家族全員、災害で死んでみてください」と住民には訴えている。どのような状況になると想定される災害で犠牲になる可能性があるのかを考えることで、それを回避するための行動や場合によっては備えが具体化されると考え、このような提案をさせていただいている。

## “防災意識”の再考

次に“防災意識”について再考したい。

なお、ここでは防災意識とはどんな意識であるのかについては、紙面の都合上、議論を割愛させていただく。読者には以下のような例をもとに防災意識について再考していただきたい。

近い将来巨大地震の発生が危惧されており、かつ河川が氾濫した場合には5メートル以上の浸水が想定されている地域がある。ここに昔ながらの商店街の中に再開発で新築マンションが増えている自治会に所属している二人の住民がいる。一人は、生まれも育ちのこの地域で、商店街組合の会長などをしていて、毎年地域の防災訓練の取り仕切りをしている人。もう一人は、結婚を機にこの地域に引っ越してきて、近所付き合いのわずらわしさを軽減するために戸建ではなくマンションを選択し、地域の防災訓練があることを知っても参加を躊躇している人。

一般的に防災意識が高いと言われるのはどちらだろうか？多くの方は前者と答えるであろう。では、地域に想定されている災害が発生した場合、生き延びる可能性が高いのはどちらだろうか？前者は個人でいろいろと防災対策をしているであろうが、地震が発生した場合、自宅が被災しなくて

も隣近所の家屋が倒壊したり火災になったりして被災する可能性がある。また水害の場合、自宅以外の安全な場所へ避難しないと被災する可能性がある。そのため、災害で死なない、という観点だけで言えば、地震でも水害でも自宅で何もしなくても生き残れる可能性が高い後の方が前者よりも生きのびる可能性が高いといえよう。

ここで指摘したいことは、意識しないと行動できない、という不安定な条件を前提とするのではなく、『災害に強い生活様式への転換』を促すことの必要性である。意識して備えるのではなく、普段の生活（無意識）の中で防災を日常化するような備え方を具体化することの方が、定型化された災害への備えよりも実行性が高くなるのではないか。命を守る備えとは言い難いが、ローリングストックやフェイズフリーなどは同じ方向性をもった考え方といえよう。

## “高く持とう”の再考

最後に、防災意識を“高く持つ”必要があるのかについて再考したい。

例えば、以下のような問い合わせを受けたら、読者の皆さんは、どのように回答するだろうか。

耐震性の低い古い木造家屋に一人で暮らしている80代の年金暮らしの高齢者から、「自宅の耐震診断を受けた方がよいか？」と相談を受けた。

地震が多発するわが国において、耐震補強、家具の固定などの自宅の安全性を高める備えは地震が命を守るために必要不可欠である。そのため、防災のことだけを考えれば、耐震診断を受けて必要な補強工事を行うべきである、という結論になる。しかし、80代の単身高齢者という属性を考えると、その自宅で居住している間に大きな地震が発生する可能性はどれほどあるだろうか。小さくない経済的負担を強いてまで耐震補強を行う必要は本当にあるのだろうか。この方にとって、もっと幸福なお金の使い方があるのではないだろうか。

防災上必要なことは必ずしなければならない、と正論を振りかざすことが、本当に人々の幸福に寄与するのかわ、今一度見直してみるべきではないだろうか。著者は、『防災は「生き方」の一つ』と考えている。何にどこまで気を配って（注意して）生活するのは、個人の経済力や何を大切にするのかに依存する。例えば、明日食べる物にも困っている人に、起こるかもしれない災害に備えて、投資せよと言っても、何の実効性もない。先ほどの例であれば、長くても10年くらいしかこの家に住まないだろうから、耐震補強はしない、という選択に合理性が全くないとは言い切れない。そこで必要になるのは、『覚悟』ではないだろうか。問題なのは、「知らずに（知ろうとせずに）、やっていない」ことであって、「わかっている（知っていて）、覚悟をもって、ここまでは備える、ここから先に生じる被害は受け入れる」という考え方があってもよいのではないだろうか。

## 防災対策に唯一絶対の正解はない

一律に日頃から高い防災意識をもつことを求めるのではなく、最低限（死なない）を担保することを目指した対策の方向性があってもよいのではないか、との問題意識を提起させていただいた。拙稿校正中の令和6年1月1日に能登半島地震が発生し、1月4日時点では死者84人、行方不明179人と発表されている。「日頃から防災意識を高く持って、災害に備えよう」と多くの人が訴えてきたこと（備え）をちゃんと実行していたら、この災害で犠牲となった方々は助かったのであろうか。我々が訴えてきた備えは、本当に災害から命を守ることにつながるのかわ、改めて考えることの必要性を痛感している。

### 【参考文献】

- 1) 柳川範之・為末大、アンラーン人生100年時代の新しい「学び」、日経BP、2022。